

本科 2 期 12 月度

解答

Z会東大進学教室

高 1 東大国語



## 【添削課題】

出典：浜田寿美男『意味から言葉へ』／琉球大学・06年

## 文章略解

たとえば、コップは「飲み物を入れる容器」であるように、一般的にものには社会的—文化的な「意味」が与えられている。しかし、コップをじっと眺めるといった非日常的なことを行うことによって、もとの社会的—文化的意味が消失してしまうこともある。それはいわば「無意味」というものの表れ方であり、そこには物理的—生理的なものしか表れてこない。そう考えてみると、赤ちゃんは大人が持つ社会的—文化的意味を意識するはずはないので、まさにこの「無意識」の状態で物理的—生理的なものに接しているといえる。

## 解答

問1 (ア) 次第 (イ) 光沢 (ウ) 凝視 (エ) 把握 (オ) 素朴

問2 コップを一輪挿しや鉛筆立てに使うことは、本来の意味からはずれるものの、同じ社会や文化の中に生活している人であれば容易に用途や意味を理解できる行為なので、社会や文化が規定している意味であることには変わりないとということ。

問3 物をじっと眺めることや、言葉を復唱するといった非日常的な行為をすることで、ものや言葉が社会や文化の規定する意味連関から外れ、まったく意味を持たない物の塊にすぎなくなるから。

問4 大人は社会や文化によつて定められた社会的—文化的意味を持つたものとして対象を見るが、赤ちゃんはその意識をまだ持たな

いために、物理的—生理的に直接対象と接している。赤ちゃんが赤い輪をしつこく見るのはその表れである。

### 特別問題

ものには社会的—文化的な「意味」が与えられている。しかし、脱意味連関の行為によつて、もとの社会的—文化的意味が消失してしまうこともある。それはいわば「無意味」というものの表れ方であり、そこには物理的—生理的なものしか表れてこない。そう考えてみると、赤ちゃんは大人が持つ社会的—文化的意味を意識するはずはないので、まさにこの「無意識」の状態で物理的—生理的なものに接しているといえる。「一九一字」

## 【問題】（自習）

出典：丸山健二「雪間」／大学入試センター試験 国語Ⅰ・Ⅱ・97年・追試験

### 文章略解

祖母が急死したため、小学生の忠夫は母と母の実家に来ている。そこでは母や伯母が、祖母の通夜のために大忙しである。そんな中、忠夫は一人離れ屋に住んでいる祖父になつき、彼と行動を共にする。母屋の母や伯母とは対照的ながらも、祖父は祖父なりに祖母の死を悲しんでいるのだった。その祖父の悲しみが忠夫との関わりの中でしだいに明らかになっていく。

### 解答

問1 ①||②

③||④

⑤||⑥

⑦||⑧

⑨||⑩

問4 (エ)

問5 (エ)

問6 (イ)

問2 (イ)

問3 (オ)

### 解説

問2 登場人物の心情を考える問題である。このような問題では、登場人物の言葉や態度あるいは場面設定などに注目する。

まず注目しなければならないのは、本文前の説明文に書かれている、祖父が母屋から一人離れて住んでいるという設定である。

そのことについて、本文の中では詳しい説明はされていない。しかし、このことから、母や伯母と祖父の間に十分な意思疎通がなされていないことが推測される。忠夫に聞くまで、祖父が山に行っていた事実を母たちが知らなかつたことなどからも、母たちと祖父の間の「距離」が読み取れよう。

そのことを前提に、問題の箇所を読み進めてみよう。傍線部(1)の前で、伯母は、祖父がうざぎを捕りに行つたことを知り、祖母が死んだにもかかわらず、殺生をしたことに対して祖父を非難している。伯母は（母も）、夫が自分の妻の通夜に出席するのは当然のことだと考えている。だから、祖母の通夜の行われている母屋に出向かないばかりか、生き物を殺したりしている祖父の行為

を「薄情」だと言う。

しかし、これが伯母からの一方的な発言であることに注意。「祖父は返事をしない」状態なのだから、本当に、祖父が祖母に対して「薄情」なのかどうかはわからない。ただ、伯母や母が祖父を薄情だと思つていてるということしか読み取ることはできない。

離れ屋の外に出てからの伯母と母との会話も、彼女たちは「薄情」としか見えない祖父が前提になされている。妻が死んだにもかかわらず、通夜の席に顔も出さないような祖父と結婚した祖母は、「気の毒」というほかないのである。そのような祖母への同情は、「姉さんはよがつたよ、結婚なんかしくつて」「男なんて勝手なもんだよ」という母の言葉から、しだいに身勝手な男に対する女としての立場からの共感に変わつていてわかる。

それゆえ正解は(イ)となる。(ア)「父の冷たさ」(エ)「父の薄情な態度」(オ)「父のわがまま」は、事実として捉えてはいけない。また、

(ウ)「忠夫への憤り」というのもおかしい。ここでは、彼女たちの言葉から理解されない祖父の姿を読み取ることができる。

### 問3 問2では母たちにとって理解不能な祖父の姿を読み取つたが、以下の設問ではそのような祖父の内面を忠夫との会話などを通じて読み取つていくことになる。

まず、忠夫が母屋から帰つて来た場面に注目しよう。彼が離れ屋に入ると、祖父は「さつきと同じ恰好でろばたに坐つて」おり、そして「ごはん食べないの」と聞く忠夫に対して「食べたくないんだ」と答えるのであつた。これらの様子から、祖父が本当は祖母の死を悲しんでいるのだということが読み取れるだろう。悲しみの余り何も手につかない放心状態と言つてよいかもしれない。また、「ばあちゃん、死んだね」と言われた祖父が「急に起き、紐を引つぱつて電灯を消した」のも、悲しみの涙を隠すためだつたと考えられる。

そのような祖父の悲しみをこの小説は直接描くことをしない。忠夫との会話及び母屋との対比によつて間接的に示唆するのみである（そこがこの小説の難しい所でもあり、また設問のポイントもある）。それゆえ、母屋の騒ぎが挿入されていることの意味と効果を直接本文から読み取ることは困難である。したがつて、祖父の悲しみを読み取つた後は、選択肢を吟味して消去法で攻めていくしかない。

(ア)「人々と和することのできない祖父の冷酷さと頑固さ」がおかしい。問2で述べたように、これは母たちの目に映つた祖父の姿でしかないのである。(イ)「離れ屋における祖父と忠夫の静かな会話を配し」ていることの意味を問うてているのではない。設問に

対する解答の方向が逆である。(ウ)「世の無情と悲哀」(エ)「人生の縮図」ということは、本文から読み取れない。この場面で描かれていてるのは、祖父の悲しみである。それゆえ(オ)が正解となる。「祖父の孤独」というのも、問2でみたような母たちに理解されない祖父の姿と一致する。

問4 問3では祖父の悲しみが母屋との対比の中で描かれていることを見たが、問4も同じく忠夫との会話から祖父の悲しみを読み取らせる設問である。具体的に確認していこう。

問3の解説の前半で確認したように、祖父は祖母の死に対して深い悲しみを感じているのであつた。しかし小学生の忠夫には、そのような祖父の深い悲しみを思いやることができない。それゆえ、忠夫は祖父にいろいろと話しかけていくのである。それに対して、祖父は忠夫の質問に答える程度で自分からはあまり話しかけてはいない。そのような祖父の態度は、問3の解説で記したようだ、「悲しみの余り何も手につかない放心状態」の延長と考えてよいだろう。相手が幼い孫であるがゆえに、応じているだけなのである。一方に悲しみを感じいつも孫の相手をする祖父の姿を思い描きたい。

ところが、会話が進み忠夫の発言が「血出さなければよかつたね」や「死ぬと淋しいんだって」などとなつてくると、これまでの質問とは異なり祖父もにわかには返答できなくなつてくる。死んだものたちの側に一步踏み込んだ言葉であるだけに、心の深層にある祖母の死に対する悲しみと呼応し合うのである。それゆえ、祖父はもうこれ以上話を続けることができずに「淋しくなんかないさ」「死んだらおしまいだ」と話を打ち切り、背を向けて「寝よう」と言うのである。忠夫の何げない言葉が祖父の悲しみに触れてしまつたために、すぐに言葉がでてこないという場面である。

したがつて、(エ)が正解となる。(ア)「はじめて」が間違い。祖母の死に対する悲しみは一貫している。(イ)「驚いて言葉を失つている」のでもなく(ウ)「深く考え込んでいる」のでもない。彼は話が続けられないのである。(オ)「うさぎの動く音や母屋の騒ぎに聞き入つていた」のはむしろ忠夫の方である。

問5 繰り返し述べてきたように、誰にも理解されない祖父の悲しみを読み取ることが、この問題の主眼である。それゆえ、すぐさま、(エ)が正解であろうとの予想が立つが、ここでは、一つ一つの文脈をたどりながらそのことを確認していこう。

まず、忠夫について見てみよう。「ばあちゃん、死んだね」「ばあちゃん死んだね」という言葉からは、死に対する忠夫の特別な

感情は読み取りがたい。しかし、「ばあちゃんは一人で死んで淋しいんだって」という言葉には、祖母の死に対する一種の同情を感じ取れるであろう。それが「ばあちゃんねえ」と語り出しながら「うさぎのことを話そうと思った」というあたりになると、彼の中では祖母の死とうさぎの死とがどこかしら重なりだしているのである。そのように忠夫の場合、しだいに死に対してなんらかの感情を持ち始めていくことが読み取れるのである。

祖父についてはどうであろうか。「ばあちゃん、死んだね」と言われた彼が「急に起き、紐を引っぱって電灯を消した」のは、深い悲しみのためであった（この思いが祖父に一貫していることは、これまでの設問でも確認済みである）。ところが、「淋しくなんかないさ」「死んだらおしまいだ」という言葉からは、それに加えて、なんとか祖母の死を当たり前の出来事として受け止めようという思いが感じ取れる。祖母の死を深く悲しむがゆえに、その気持ちを認めないことでそのショックを避けようという心情である。

以上の内容を全て充たしているのは、やはり(エ)だけである。

#### 問6

表現を問う設問である。このような設問では、個人の主観に頼らず客観的に事実を確認していくことが大事である。自分の印象だけで答えようとすると、大きく読み違いをしやすいので注意しよう。まず、これまでの設問から言えることは、祖父の悲しみが非常に間接的に表現されていたということである。それゆえ、「心情が正確に描き出されている」のような方向での正解はあり得ないだろうとの予想が立つ。しかし、これのみから正解を導き出そうとしてはいけない。繰り返しになるが、このような設問では客観的な事実が大切なのである。

(ア)について少し詳しく見てみよう。「外界の出来事を敏感に受け止める子供の内面世界の透明な純粹さ」や「硬質で知的な表現」などは、非常に主観的な判断によるので正解の根拠にはならない。よつて無視してかまわない。ポイントは「忠夫の内面描写に終始」のみである。これなら、忠夫の気持ちを書いた部分がどのくらいあるかを客観的に調べられる。この点に注意して本文を読み返してみると、会話が中心であることに気づく。それゆえ、(ア)は不正解である。このように以下の選択肢も吟味していくと、(イ)「短い会話や簡潔な情景描写」は、一応クリア。(エ)「自然描写に力点」は、本文ではほとんど自然描写がないので不正解。(オ)は、「短文の連続」というのが微妙だが、「人物の内面までを正確に描き尽くした」が決定的に致命傷で不正解。(ウ)については客観的に調べられそうなポイントがないので保留として、(イ)と(ウ)についてさらに詳しく見てみる。

(ウ)の「大人たちの隠された心情の対立」というのは忠夫と祖父の会話からは出てきそうにない（そこから読み取るべきなのは祖父の悲しみである）。一方の(イ)は「複雑な思いを暗示」というのが、予想とも一致する。それゆえ、(イ)が正解とわかる。

●  
×  
毛  
●

## 【問題】（演習）

出典：『史記』卷七「項羽本紀」の前半の一節／お茶の水女子大学

## 書き下し文

陳嬰なる者は、故東陽の令史にして、県中に居り、素より信謹にして、称して長者と為す。東陽の少年其の令を殺し、相聚まるもの數千人、長を置かんと欲するも、用に適するもの無し。乃ち陳嬰に請ふ。嬰能はずと謝す。遂に彊ひて嬰を立てて長と為す。県中の従ふ者二万人を得たり。少年嬰を立てて便ち王と為し、軍を異にし蒼頭して特起せんと欲す。陳嬰の母嬰に謂ひて曰はく、「我汝の家の婦と為りしより、未だ嘗て汝の先古の貴き者有りしを聞かず。今暴かに大名を得るは、不祥なり。属する所有るに如かず。事成らば猶は侯に封ぜらるるを得ん、事敗るるも以て亡げ易からん、世の指名する所に非ざればなり」と。嬰乃ち敢て王と為らず。

## 現代語訳

陳嬰という者は、もともと東陽県の令史で、県城内に住み、平素から誠実でつつしみぶかい人として「長者」と言われていた。（陳勝が挙兵したことを聞いた）東陽県の若者達が（自分達もそれに続こうと）県令を殺し、数千人の者が集まつたが、（彼らが）リーダーを立てようとしたけれども、適当な人物がいなかつた。そこで陳嬰に（自分達のリーダーになつてくれるよう）お願いした。陳嬰は自分には（そんなことは）できないと断つた。（しかし、若者達は）結局強引に嬰をリーダーにしてしまつた。東陽県内から従軍する者が二万人にのぼつた。（そこで）若者達は陳嬰を王にまつりあげて、他の軍とは異なるよう青黒い頭巾をかぶつて蜂起しよとした。陳嬰の母が嬰に向かつて言うことには、「私がお前の家の嫁となつて以来、まだ一度もお前の先祖に高貴な位に就いた者がいたと聞いたことはない。今、急に（あんたが、王などという）大きな名声を手にするのは、不吉なことだ。所属する所があるのにはかなわない（＝誰かの下に属しているのが一番だ）。蜂起が成功すれば、それでも諸侯ぐらいには取り立ててもらえるだろうし、（ま

た) 蜂起が失敗しても逃げやすいだろう、(それは) 世間の人々から名指しされない ( = 世間の人々から目をつけられることがない)  
からだ。」と。そこで陳嬰はけつして王となろうとはしなかつた。

### 解答

問1 陳嬰は、自分には若者達のリーダー役はできないと断つた。〔解答例〕

問2 為王〔本文3行目〕

問3 (ウ)

問4 ① = すなは (ち) / すなわ (ち)      ② = よ (り)      ③ = あへ (て) / あえ (て)

問5 蜂起が失敗しても逃げやすいだろう、(それは) 世間の人々から名指しされることがないからだ。〔解答例〕

問6 (オ)

## 【問題】(自習)

出典：『蒙求』／立教大学

### 書き下し文

子思衛に居りしき、袒袍表無く、二旬にして九食するのみ。田子方之を聞き、人をして狐白裘を遺らしむ。其の受けざるを恐れ、因りて之に謂ひて曰く、「吾人に假せば遂に之を忘る。吾人に与ふれば之を棄つるがごとし」と。子思辞して受けず。子方曰く、「吾有るも、子無し。何の故にか受けざる」と。子思曰く、「假之を聞く、妄りに与ふるは物を溝壑に遺棄するに如かず。假貧なりと雖も、身を以て溝壑と為すに忍びず。是を以て敢て當らず」と。

### 現代語訳

子思が衛の国に住んでいた時、（生活は困窮し）綿入れのどてらは表地が擦り切れてしまい、（食事も）二十日間に九回食べるのがやつとだつた。田子方は子思の生活の窮乏ぶりを聞き、使者をやつて（高級な）狐白裘を贈らせた。（子思が狐白裘を）受け取らないことを危惧し、そのため（使者を通じて子思に）伝えたことには、「私は人に物を貸すと、そのまま貸したこと忘れてしまう。私は人に物を与えると、（一切見返りを期待しないことはまるで）それを捨てたのと同様なのです」と。（それでも）子思は固辞し（狐白裘を）受け取らなかつた。（そこで）子方が尋ねたことには、「私は（生活や金品に余裕を）持つてゐるが、あなたにはありません。（それなのに）どうして受け取らないのですか」と。子思が（答えて）言うには、「私は『むやみに（人に金品を）贈るよりは、それをどうぶに捨ててしまつた方がいい』と（いう格言を）聞いたことがあります。私は生活に困窮してはいますが、私自身をどうと見なす恥辱にはたえられません。こういうわけで、どうしても（申し出を）お受けしないのです」と。

### 解答

- 問1 (ウ)      问2 (ア)      问3 (ウ)      问4 (オ)      问5 (ウ)      问6 (ウ)

問1 訓読の設問。返り点・送り仮名が省かれているので、傍線部をよく見て、「句形」「語法」「多義語」など漢文特有の用法のある漢字に着目して考える。

選択肢を見ると、(イ)以外はすべて「……しむ」で終わっていることからもわかるように、「使」が典型的な《使役》の句形を示している。「使・令・教・遣」の四文字については、「使<sub>二</sub><sup>し</sup>A<sub>ヨシテ</sub><sup>セ</sup>B<sub>一</sub>」の語順で「AをしてBせしむ」と訓読し、「AにBさせる」といった意味を表すことを記憶しておく。ただし文脈上明白な場合には「使・令・教・遣」の直下の「A<sub>ヨシテ</sub>」にあたる語は省略されることも多い。また、今回も該当するようには「使・令・教・遣」を「しむ」とは読みますに本来の意味で「遣る」「使ふ」「教ふ」などと《使役》以外の元の意味で読む場合もあるからお忘れなく。

〈困窮を極める「子思」の贈を「田子方」が耳にし、高価な品を贈ったが子思は受け取らなかつた〉、という前後の文脈を考慮して、《使役》の句法を解釈する。注(\*)から、「狐白裘」が名詞であることがわかるので、原則通りの語順に読みればよい。すると、きちんと「をして」を用いて《使役》に訓読している選択肢は(ウ)しかない。なお、述語動詞にあたる「遣」の読み方に注意がいる。前記の「しむ」以外に、「やる」「つかわす」「おくる」などと動詞として読むので注意する。

問2 指示語の指示内容の設問。「其<sub>キ</sub>」は「その」「それ」と読み、「之<sub>シ</sub>」「此<sub>シ</sub>」「斯<sub>シ</sub>」「諸<sub>シヨ</sub>」などを用いる「これ」「この」と同様、前にある内容を指示する《指示語》〔=指示代名詞「そ」+格助詞「の」〕である。漢文では、前の内容なら読みにかかわらず「人」「物」「事柄」など幅広く指示する点に注意する。また、その《指示語》の代りに「解答」を代入して読んで意味が通じるか確認することも大切である。

ここは「其の受けざるを恐れ、因りて之に謂ひて曰く」となつていて、「其<sub>キ</sub>」「之<sub>シ</sub>」「直前の問題の人物「子思」」を指すことが明白である。さらに、田子方の配慮にもかかわらず、子思が受け取りを固辞したことからも子思だと確認できる。正解は(ア)の子思。なお、もし正解が文脈上思い浮かぶ(イ)の「狐白裘」ならば、原文は語順が「恐<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>受<sub>ク</sub>其<sub>キ</sub>」とならなくてはならない。

問3 多義語の設問。日本語の漢字でも「樂」〔ラク・たのしむ／ガク・音楽、「省」〔ショウ・はぶく／セイ・かえりみる〕のように、二つの意味や音を持つ漢字は少なくない。その区別は熟語を作つて考えるとよい。ただし、三つ以上の意味や読みのある漢字

は多義語として頻出があるので主だったものは記憶しておきたい。

今回の「辞」も選択肢にあるように、(1)ことば：「辞書」、(2)別れる：「辞去」、(3)断る：「固辞」、(4)やめる、しりぞく：「辞退」などの意味を持つ多義語である。一文は「子思辭して受けず（＝子思は申し出を断つて受けなかつた）」の意味であるから、それに近い選択肢を選ぶ。(ア)「謝辞」、(イ)「辞令」、(オ)「言辞」はいずれも(1)ことばの意味で用いられており、(エ)「辞去」は(2)別れるの意味であるので、(3)(4)に近い(ウ)「辞退」を選ぶ。

**問4** 訓読の設問。漢文で多用される《対句表現》に着目したい。「有無」という熟語のあるように、「有り」と「無し」は対義語である。また、「吾（＝私＝田子方）」と「子（＝あなた＝子思）」も対になつていて、そこで、文の中間で区切つて、「吾有・子無」とすると対句が生きる。普通に読めば「吾有り、子無し」だが、「」の部分をどう接続するかが肝心である。ここは「吾有るも、子無し（＝私は持つているけれど、あなたは持つていない）」と《逆接確定条件》に読むのが二人の関係から妥当である。なお、文脈上は次の文が「何の故に受けざる（＝なぜ受け取らないのですか、受け取ればよい）」という反語のニュアンスを含む疑問文に読んでもあることも重要なヒントである。

**問5** 解釈の設問。送り仮名が省かれているが、「不如…」が「百聞は一見に如かず（＝百回他人の見聞を聞くよりは一回自分で見聞する方がよい）」と同様の《比較》の句形であることに気付かなくてはならない。まずは正しく書き下し文に訓読してから解釈するといい。返り点に従つて「（みだりに与ふるは）物を溝壑に遺棄するに如かず」と訓読することができる。「…に如かず（＝若かず）」は、直訳すると「…に及ばない、かなわない」だが、意訳すると《比較》の「（～よりも）…の方がよい」となる。ここから正解は(ウ)。紛らわしい(イ)「…ようなものだ」は、「不」が無い場合の「物を溝壑に遺棄するが如し」の解釈である。

**問6** 空欄補充の設問。子思の最後の返答、「(吾)之を聞く、……」は漢文の説話によく出てくる、格言や諺、偉人聖人の言葉などの引用をして、自己の見解をより権威づける言い方である。

問5で見たように、この格言は「むやみに（人に金品を）贈るよりは、それをどぶに捨ててしまつた方がいい」という内容であつた。また、「忍ぶ」は巴行上二段活用で用いる（まれに四段活用）多義語で、(1)耐える、我慢する、(2)隠れる、隠す」の意味

があり、また「以<sup>テ</sup>A為<sup>ナス</sup>B」は〈①AをBだと考える、②AをBだと見做す、③AをBにする〉などの意味を表す重要語句である。以上から、空欄を含む一文は「私伋は生活に困窮してはいますが、私自身を□と見なすことにはたえられません」といった意味になる。したがつてこの空欄には引用の格言を受けて「どぶ」に該当する(ウ)「溝壑」があてはまる。

## 【問題】(演習)

出典：沈括『夢溪筆談』卷二十「神奇」／鹿児島大学・改

## 書き下し文

人に前知する者有り、數十百千年の事皆能く之を言ふ。夢寐にも亦或いは之有り。是れを以て知る、万事前定せざるは無しと。予謂へらく、然らずと。事前定するに非ず、方に其の知る時は、即ち是れ今日なり。中間の年歳も亦此れと時を同じくす。元より先後あるに非ず。此の理宛然たり。之を熟観せば、諭るべし。或ひと曰く、「苟も能く前知せば、事に不利有る者、之を遷避すべし」と。亦然らざるなり。苟も遷避すべくんば、則ち前知の時、已に避くる所の事を見る。若し避くる所の事を見ざれば、即ち前知に非ず。

## 現代語訳

人の中に（これから先に起こる出来事を）前もってわかる者がいて、何十年、何百年、何千年も先のことを、すべて予言することができる。眠つて夢を見ている間にも同じようにそれがわかることがある。このことによつて（次のことが）わかる、世の中の出来事はすべて前もつて決まっていないことはない（＝世の中の出来事はすべて前もつて決まっている）と（このように言う人がいる）。（しかし）私が考えるには、そうではない。物事は前もつて決まっているのではなく、ちょうどその出来事が起こつたのを知る時は、とりもなおさず今日（＝起こつたその時）である。（だから）中間の年月も今日と同じである。もともと先や後（といつた、時の違い）があるのでない。この道理ははつきりしている。このことはよく考えれば、理解することができる。ある人が言うことに、「かりにこれから起こる出来事を前もつて知ることができるならば、その出来事が自分にとつて不都合な場合、それを避けることができるはずだ」と。これも同じようにそうではない。かりにも避けられるのであれば、前もつてそれを知つた時に、とつくに避ける事態をはつきり

知つて いること に なる。もし（その不都合な出来事を）避ける事態を予見しなかつたとすれば、それは前もつてそのことを知つたといふことには な ら ない。

● 解答

問1 前知

問2 これをもつて

問3 かりにこれから起ころる出来事を前もつて知ることができるとならば、その事が自分にとつて不都合な時は、避けることができるはずだ。  
〔解答例〕

問4 もしさくるところのことをみざれば、

問5 (イ)

## 【問題】(自習)

出典：「後漢書」「郅惲伝」の一節／九州大学・改

### 書き下し文

郅惲の友人董子張は、父先に郷人の害する所と為る。子張の病みて將に終はらんとするに及びて、惲往きて之を候す。子張歿するに垂として、惲を見て歎歎して言ふ能はず。惲曰く、吾れ子の天命を悲しまずして讐の復せざるを痛むを知れり。子在せば、吾れ憂ふるも手づからせず、子亡くば、吾れ手づからするも憂へざるなりと。子張但だ目撃するのみ。惲即ち客を將ゐ仇人を遮り、其の頭を取りて以て子張に示す。子張見て氣絶す。惲因りて県に詣る。県令其の自首して獄に詣るを欲せず、故に之に応ずること遲し。惲曰く、友の為に讐を報ずるは、吏の私なり。法を奉じて阿らざるは、君の義なり。君を虧きて以て生くるは、臣の節に非ざるなりと。乃ち趨り出でて獄に就く。令跣にて之を追ひ、刀を抜き惲を要めて曰く、子我に従ひて出でずんば、敢て死を以て心を明かさんと。惲乃ち出づ。

### 現代語訳

郅惲の友人である董子張は、その父親が以前ある村人によつて殺されていた。子張が病気になり、今にも死にそうな状態になつたので、惲は出かけて子張を見舞つた。子張は、今にも息絶えようとしており、惲をみつめますり泣くだけで、ものを言うことができなかつた。(それを見て) 惲は言つた、「私には、君が(今) 寿命の尽きることを悲しんでいるのではなく、復讐が出来ないことに心を痛めているのだ、ということがわかっている。君が生きているうちは、私は気にはかけるが、自分から仇に手出しはしない。しかし君が亡くなつたならば、私が直接仇を討つけれども(そのことについて) 何の心配もしない。」と。子張は、ただじつと惲を見つめるばかりであつた。(その子張の意を悟つた) 惲は、すぐさま自分の食客をひきつれて仇を待ち伏せ、その首を取つて来て子張に見せた。子張はそれを見て(安心して) 息を引き取つた。惲はそこで県の役所に赴いた。(惲の申し出を聞いた) 県令は、彼が自首して牢獄に入るのを望まず、だから彼の処置をひきのばした。惲が言つた、「友のために仇を討つというのは、役人の立場を私事に利用するものです。法を遵守して曲げないのは、君主たる者の取るべき正義です。君主をないがしろにしてなお生きながらえるのは、私の節義にあ

いません。」と。惄はその場から走り出して、自ら牢獄に入ろうとした。県令は裸足のままその後を追つて刀を抜き、押しとどめて言つた、「あなたが私とともにこの牢獄から出ないならば、私は、自殺しても自分の気持ちをあなたに知らせましょう。」と。惄はやむなく牢獄から出た。

### 解答

問1 父先ニル為ル鄉人ノト所レ害スル。

問2 子張の存命中は、仇討ちについて心配はするが自分が手を出すことはしない。しかし、子張が死ぬならば、自分で手を下し、心配などはない、ということ。〔解答例〕

子張の存命中は、仇討ちについて心配はするが手助けはしない。子張が死ねば、自分が我が身をかえりみず、仇を討つてやろう、ということ。〔別解例〕

問3 子張はただじっと見つめるだけだった。

問4 悍のわが身を顧みない友情の厚さと、節義を重んずる高潔さに心を打たれ、獄につなぐに忍びなかつたから。〔49字・解答例〕

### 解説

問1 「為ニ□ 所レ□」に着眼し、受身の句形であることをおさえよう。これは、「為ニ「人」所レ「動詞」」という形で使われ、「人」ノ「動詞の連体形」所ト為ル」と訓読する。意味は、「〔人〕に〔動詞〕される」になる。

「鄉人」は熟語になることは想像がつく。「害」も、この文型に照らしあわせれば、動詞になると分かる。漢語を動詞として訓読する場合、動作を表していればサ変動詞、状態を表していれば形容動詞として読む。例えば、「冠」→「冠ス（＝「冠をかぶる」の意）」、「王」→「王タリ（＝「王となる」の意）」といふうに。「害」は、「妨害」または「傷害」「殺害」などと使われることから、「さまたげる」「傷つける」「殺す」といった意味を表すことがわかるだろう。いずれも動作であるから、サ変動詞にして、

「害ス」と読む。「害ス」は「所」に接続するから、「害スル」と連体形に変える。

以上のことから、「為郷人所レ害」の部分は、「郷人ノ害スル所ト為ル」と読める。

冒頭にある「父」が主語であることはわかるはず。具体的に言えば「董子張の父」である。

したがって、傍線部(a)の意味は、「董子張の父が『郷人』に『害』された」ということになる。「郷人」の「郷」は、漢語では「都」に対する「里」の意で使われることが多い。ここでも「村人」の意を表している。また、「害」は、この後に、董子張の父の復讐の話が書かれているから、「殺害」「殺す」の意味と判断できる。つまり、「董子張の父が郷人に殺された」という意味になる。「先」は、「為」という動詞の上に置かれているから副詞である。傍線部以降の文脈が「父の殺された仇を討つ」になるので、この「先」は「以前」の意だと考えられる。だから「先に」と読む。「まヅ」と読むと、「最初に」といったニュアンスになってしまふ。

問2 傍線部(b)は「惲」の言葉である。誰に対し面向かれたものかと言えば、「子張」である。この言葉を発した時の状況をおさえおこう。まず、「子張垂<sup>レ</sup>歿、……歟歎不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>言」と、「子張が今にも死にそうで、惲を見つめて泣いているだけで何も言うことができない」状態にある。そういう「子張」に、「惲」は、「吾知<sup>レ</sup>也。」と、「私は子張が『讐ノ復セザルヲ痛ム』という気持ちであることがわかつてゐる」と言つてゐる。これに続くのが、傍線部(b)という言葉である。

冒頭の「子」は、会話文で使われ、しかも修飾語がなく単独で文の主語となつてゐるから、「子供」ではなく、「あなた・君」という意の二人称代名詞であるとわかる。ここでは「惲」の発言を聞いてゐる「子張」を指してゐることになる。また、「吾」は、当然、発言者の「惲」のことである。

傍線部(b)の内容は、「子在」——「吾憂而不<sup>レ</sup>手」 $\rightarrow$ 「子亡」——「吾手而不<sup>レ</sup>憂」と対比されていることに着眼しよう。「子在」「子亡」は、それぞれ「子張が生きている場合」「子張が死んだ場合」を指すと考えられるから、あとは、「憂」「手」の内容がわかればよいのである。

「憂」は、「心配する」、「手」は「自分の手で（自分から）する」ということである。すると、傍線部(b)を直訳すれば、「子張が生きている場合には、私は心配するけれども自分ではない、子張が死んだ場合は、私は自分で心配はしない」と言つてゐることになる。それぞれ「何を」心配し、心配しないのか、また「何を」自分からし、自分からしないのだろうか。

傍線部(b)の直前で、「憚」は、「私は子張が『讐ノ復セザルヲ痛ム』という気持ちであることがわかつてゐる」と言つた。子張は、父を村人に殺されており、今は死にそうなのだから、『讐ノ復セザルヲ痛ム』とは、「父の復讐（＝復讐）」ができないことを嘆く」という気持ちである。そして、傍線部(b)の言葉の直後を見てみよう。「憚即將客取其頭」と、「憚」が（子張の父の）仇人の頭を子張に見せるという行動をとっている。つまり、二人の関心事は、「子張の父の仇討ち」であることがわかる。

したがつて、「憂」とは、「子張の父の仇討ち」を心配すること、「手」とは、「子張の父の仇討ち」を憚みずからすること、になる。

ここから、傍線部(b)は、「子張が生きているならば、自分は『子張の仇討ち』について、心配はするがそれを自分ですることはしない。（しかし）子張が死ぬならば、『子張の仇討ち』を、自分が直接するから心配なんてしない」という意味になる。これをまとめればよい。

【別解】は、直後の「憚」の行動から、「子亡、吾手」が「憚」の本当に言いたいことであると考えて傍線部(b)を説明したものである。この設問は、「内容を説明しなさい」という指示だから、現代語訳ではないという点に注意すること。

### 問3 ポイントは、「但ゝ而已」という句形と、「目撃」の意味の把握にある。

「但ゝ而已」は、「ひたすら～だけである」という限定の句形。「目撃」は、現代語の「目撃」ではない。傍線部(c)は、傍線部(b)の「憚」の言葉に対する反応である。そこで、「憚」の見舞いを受けた「子張」の様子から判断する。問2の解説でも触れたが、「子張」は、父を殺されている。それなのに、今にも死にそうな病状なのである。2行目に「子張垂歿視憚歎欷不能言」とあるが、これはその後の「憚」の「私には、……という君の気持ちがわかつてゐる」という言葉から、父の仇討ちができないことにに対する「子張の無念さ」を表していると読み取れる。また、「憚」が仇を討つた後、4行目で「子張見而氣絶」と、「子張」は、仇討ちが遂行されたとわかつてから、死んでいるのである。ここから、傍線部(b)の憚の言葉に対し、「目撃」という反応を取った子張の気持ちは、相當にうれしい気持ちであつたはずである。したがつて、「目撃」＝「じーっと見つめる」の意と推測できる。

問4

傍線部(d)は県令の言葉である。誰に対して向けられたのかと言えば、直前に「要(憚)」とあることから、「憚」である。この言葉を発した時の状況をおさえておこう。

本文4～5行目に、「憚……詣(縣)。」とあり、「憚」は、父の友人の仇を討った後、県の役所に行っている。これは、何故かといふと、続く「県令不(レ)欲……詣(獄)」という、「県令」の「憚が自首して牢獄に入るのを望まない」行動から、仇とはいえ、人を殺したこと自首し、その罰を受けるためであつたと考えられる。しかし、「県令」はそれを受け入れなかつた。それは、「憚」が人を殺すに至つた理由（＝本文の前半部に書かれていること）を知つたからだと想像できよう。

県令は、「憚」が自首してきたとき初めて「憚」と顔を合わせてゐるのだから、「憚」の人柄については、彼の言葉を通じて知つたはずである。「憚」が自分が人を殺すに至つた事情を話したからこそ、県令はそれがわかつたのである。つまり、県令は、「憚」が、死んでいく友人の代わりにその仇を討つという行動が取れるほど、「友情に厚い」とわかつたはずである。

さらに、傍線部(d)という言葉を県令に言わせた、「憚」の言葉に着目しよう。すなわち、「為(レ)友報(レ)讐、～非(レ)臣節(也)。」である。ここで、「憚」は、「友達のためとはいえ、自分は人を殺したのであり、これは、法を犯したことだから、きちんと私を裁いてほしい」と言つてゐる。ここからうかがえる憚の性格は、「節義を重んずる」というものである。

「友情に厚い」「節義を重んずる」という「憚」の生き方に非常に感動したために、県令は傍線部(d)という行動を取つたと考えられる。



L1J

高1東大国語



Z-KAI

会員番号

氏名

不許複製